

12月7日(日) サムエル記第一12章23～25節

「私もまた、あなたがたのために祈るのをやめ、主の前に罪ある者となることなど、とてもできない。私はあなたがたに、良い正しい道を教えよう。」(23節)

23節でサムエルは自分自身のことについて語ります。サムエルにとってとりなしの祈りをささげることと良い正しい道を教えることこそが大切な役割であり、そのことは主が彼に与えた召しであり、果すべき務めでもありました。そして、サムエルがもしイスラエルの民のために祈ることをやめてしまったなら、彼は主の前に罪ある者となると言います。それは、サムエルが主の御前に果すべき役割を果さない、主の召しに忠実でないことの罪です。牧師は主から召しを受けて、果すべき役割が与えられています。また信徒の方々は一人一人日々の生活の中でキリスト者として果すべき役割が与えられていて、教会の中でも召しによってなすべき奉仕があります。もし私たちがその召しに不忠実で、果すべき役割を果さなければ、私たちは主の御前に罪ある者となることをおぼえるべきです。それと同時に、牧師が日々教会員一人一人へのとりなしの祈りをなし、みことばを忠実に説き明かすことによって、信徒に良い正しい道を伝えることができるように牧師のためにも祈りましょう。そして、ペテロのためにとりなされたイエス様は、(ルカの福音書22章32節参照) 私たちすべてのために今もとりなしていただきます。そのような私たちに対する主イエス様のあわれみに感謝しつつ、私たちが互いのためにとりなしの祈りをささげるとともに、日々恐れなく主イエス様に忠実に仕える歩みをさせていただきたいと思わされます。

22節に「主がどれほど大いなることをあなたがたになされたかを、よく見なさい。」とあります。私たちが罪を犯す時、主に背く時、主に従う道から外れ、主に仕えることができなくなる時は、しばしば主への感謝が失われた時です。常に主がこの私にどれだけ大いなることをしてくださったかをおぼえれば、そこには主への感謝と喜びと主への賛美がわくはずです。主への感謝を常にささげていますか。

12月8日(月) サムエル記第一13章1～7節

「イスラエルの人々は、自分たちが危険なのを見てとった。兵たちがひどく追いつめられていたからである。兵たちは洞穴や、奥まったところ、岩間、地下室、水溜めの中に隠れた。」(6節)

1節ですが、「サウルは、ある年齢で王となり、二年間だけイスラエルを治めた。」とありますが、欄外注を見ますと、「別訳『三十歳で王となり、十二年間』」とあります。実際にはサウルが何歳で王となったかは定かではありませんし、実際に二年以上王であったはずですが、ですから、ここを解説して、実際にサウルが王であったのは短い期間だったとか、主の目になかった期間は二年だけだったという意味であるとか、さまざまな解釈が提案されていますが、実際にはよく分かりません。2節では、サウルがペリシテ軍に対抗して組織した軍の編成が記されています。「二千人はサウルとともにミクマスとベテルの山地にいて」というのは、サウルが兵を率いてペリシテ人を迎え撃つために前線にいて、息子のヨナタンは千人の兵とともに後方にいたということです。しかし3節を見ますと、ヨナタンが先に動いて、「ゲバにいたペリシテ人の守備隊長を打ち殺した」とあります。これがサウルの指示ではなく、ヨナタンの独断での行動であ

ったことは4節からも明らかです。そのよう中でサウルは国中に角笛を吹き鳴らして、戦の開始を告げ、「兵はギルガルでサウルのもとに呼び集められ」ました。一方でペリシテ人も戦いのために集まってきましたが、「戦車三万、騎兵六千、それに海辺の砂のように数多くの兵たちであった」とあります。三千人のイスラエルの兵とは比べものにならない数でした。それを見てイスラエルの人々は、「自分たちが危険なのを見てとって」さまざまな隠れられそうな場所に隠れ、7節では「兵たちはみな震えながら従った」とあります。明らかにイスラエルの兵たちは恐れていました。その恐れは、ペリシテの数多い兵士たちを見たところから来ていました。私たちも、目に見えるところだけを見るなら、不信仰、疑い、恐れ、不安、絶望感など、さまざまな思いが出てまいります。しかし信仰によって私たちは目に見えない神を見、目に見えない神の御手の働きを見させていただきましょう。その信仰のみによって私たちは恐れや不信仰や心配などに打ち勝つことができるのです。

12月9日(火) サムエル記第一13章8～12節

「今、ペリシテ人がギルガルにいる私に向かって下って来ようとしているのに、まだ私は主に嘆願していないと考え、あえて、全焼のささげ物を献げたのです。」(12節)

昨日も見ましたように、兵力においては圧倒的に不利なイスラエルの民は、隠れられそうな所に隠れたり、震えながらサウルに従っていました。その中であってサウルは、サムエルに例祭を行ってもらい、とりなしの祈りと主からのみことばをいただくと思ったに違いありません。11章1節にありましたアンモン人ナハシュとの戦いにおいて勝利できたのも主によるところが大きかったことをサウル自身も自覚的に知っていたのでしょう。ですから、すぐに戦いに出ないで、サムエルを待ったのです。ところが、なかなかサムエルは来ず、そのうちに「兵たちがサウルから離れて散っていきこう」(11節)としました。そこで、サウルは本来祭司が献げるべき全焼のいけにえを自分で献げて、それを終えた時に、サムエルが来ました。サムエルは、「あなたは、何ということをしたのか」と言います。つまり、してはいけないことをしたとサウルを叱責しているのです。するとサウルは、サムエルに対していくつかの言い訳を始めます。最初は、兵たちが自分から離れて散って行こうとしたこと、もう一つがペリシテ人がミクマスまで来ているのに、サムエルが来ていなかったこと、つまりいつ敵が攻めて来るか分からない中で、切羽詰まった状況だと言いたかったのでしょう。私たちも、サウルのように主からみことばによって、「あなたは何ということをしたのか」と厳しく叱責されているように感じる場合があります。その中で私たちは様々な言い訳をして自分自身を納得させ、罪意識をなるべく軽くしようと努めます。しかし、私たちが申し開きをしなければならないのは、人ではなく、自分自身でもなく、主なる神様です。そして、主の御前に私たちの言い訳は通用するのでしょうか。それは神様が納得して受け入れてくださる正当な言い訳なのでしょうか。むしろ主は私たちの言い訳ではなく、私たちの悔い改めのことばを聞きたいと願っていらっしゃるはずです。主の御前に言い訳せず、謙遜に悔い改める者とさせていただきましょう。

12月10日(水) サムエル記第一13章13節

「愚かなことをしたものだ。あなたは、あなたの神、主が命じた命令を守らなかった。主は今、イスラエルにあなたの王国を永遠に確立されたであろうに。」

13節でサムエルは「愚かなことをしたものだ。」と厳しくサウルを責めます。しかし、サムエルは何を指して愚かなことと言っているのか、また主が命じた命令とは何だったのかという疑問が残ります。まず本来であれば、7章9節にありますように、サムエルがささげ物を献げ、彼が主に叫び、そしてサムエルに主の答えが与えられるのを待たなければなりません。すなわち、この戦いは主の戦いとして行うべきなのかそうでないのかを主に問うということです。ですから、サムエルのギルガルへの到着を待たないで、ささげ物を献げたというのは、主のみことばを聞くことなく戦いに出ようとしたということであり、それは主への信頼が欠けている行動であったと言わざるを得ません。それとともに、サウルは王であるにもかかわらずささげ物を献げたことも愚かなことでした。実際に、サウルは戦いに祭司たちを連れていたはずですから、ささげ物を献げることは祭司たちに任せればよかったです。彼らを差し置いて、サウル自身がささげ物をささげるということは、主にゆだねつつ、戦いに臨むというよりも自分の力、意思、考えをもって戦いに臨もうとしたことを意味しています。サウルは王として民を代表し、いつでも神のみことばを守り行わなければなりません。戦争に行く前には特にそのことが求められていました。なぜなら、王は主の主権のもとに置かれていて、主のみことばのままに民を導かなければならなかったからです。ですから決して自分勝手な行動というものは許されなかったのです。ですから、サウルがサムエルの着く前にささげ物をしたことも、そしてみことばを聞き、みこころを伺う前に戦いに出ようとしたこともすべてが愚かなことであり、主が命じた命令を守り行わなかったことにつながるのです。そして、さばきとしてサウルを通してイスラエルに王国を永遠に確立されることはないと言われていました。その永遠の王国の確立はダビデに与えられることになります。私たちも何か行動に移す前に、常にみことばに聞き、みこころを確認しているでしょうか。私たちも主の主権の中に生き、行動している一人一人です。ですから、自分勝手な思いや考え、願い、そして自分の利益を優先して行動を起こすのではなく、常に主に聞き、主に従いましょう。

12月11日(木) サムエル記第一13章14節

「しかし、今や、あなたの王国は立たない。主はご自分の心にかなう人を求め、主はその人をご自分の民の君主に任命しておられる。主があなたに命じられたことを、あなたが守らなかったからだ。」

「しかし、今や、あなたの王国は立たない」とサムエルは宣言します。それは、「主があなたに命じられたことを、あなたが守らなかったからだ。」とその理由を明らかにします。主が命じられたことを守り行うことによって私たちは祝福を受けることができます。これは時代を越えて決して変ることのない私たちの信仰の大原則であり、聖書が語っていることです。もし私たちが神から祝福された歩みを送ることを願うのであれば、私たちは聖書を通して教えられている主が命じられていることを守り行うべきです。しかし、私たちが主の命令を自分の力で守り

行うのではありません。それができないことはイスラエルの民が、その歴史を通して実証済みです。むしろ私たちは、主の恵みとあわれみにより主の助けをいただきながら、主の命令を守り行う歩みをするのです。

さらに「主はご自分の心にかなう人を求め、主はその人をご自分の民の君主に任命しておられる。」と言いますが、「求め」と「任命する」と訳されている動詞は、預言的完了形が用いられています。これは確実に起る将来のことを意味する用法で、実際にダビデがイスラエルの王座に就くことで、このことが実現しました。神様は、常に「ご自分の心にかなう人を求め」、その人をご自分のみこころの成就のために用いようとされ、その歩みを祝福しようとされています。私たち一人一人のことをも見ておられる主の御前に、私たちはみこころにかなう歩みをしているでしょうか。私たちを見ておられる主は私たちを忠実な者と認めて、ご自分の働きに召そうとしておられるでしょうか。私たちが、真実に主と向き合い、主の命令を守り行うことで、主の心にかなう者となるように祈りましょう。

12月12日(金) サムエル記第一13章15～23節

「サウルが彼とともにいた兵を数えると、おおよそ六百人であった。」(15節)

イスラエルにはもともと三千人の兵がいたはずですが、(1節)隠れられそうな場所に隠れたり(6節)震えながらサウルに従っていた兵の中には(7節)サウルを見捨てて逃げて行った者たちもいたかもしれません。サウルも兵の数が少なくなってしまうことに気がついたのでしょう。兵の数を数えるとおおよそ六百人になっていました。さらに19節を見ますと、「イスラエルの地には、どこにも鍛冶屋を見つけることができなかつた」とあります。つまりペリシテ人が鉄工の技術を独占していたのです。その理由として「ヘブル人が剣や槍を作るといけな、とペリシテ人が言っていたからであった」とあります。農機具を研ぐのですらペリシテ人の所へ行かなければなりません。ですから、サウルと息子ヨナタン以外に剣や槍のような武器がないのは当然でした。これらの情報からも、イスラエルがペリシテと戦うには圧倒的に不利な状況にあったことが分かります。私たちも自分の目に見えることを気にして、そこにとらわれてしまいます。そして、恐れたり、不安になったり、心配したりし始めるのです。しかし、神様がみわざをなして信じる者に勝利を与えてくださる時には、目に見えるところは一切関係ありません。人数が少なくとも、その少人数の者を用いて主は勝利を与え、武器が少なくても、その少ない武器を用いて主は勝利を与えてくださいます。ですから、私たちが信仰の歩みにおいて戦いに備える場合に必要な武器は主への信仰、主に信頼する心です。今日、私たちの心には恐れや不安、心配などが満ちていないでしょうか。私たちの心からそのような思いがなくなり、平安によって満たされるまで、私たちは主への信仰が与えられるように祈りましょう。

12月13日(土) サムエル記第一14章1～5節

「そのようなある日、サウルの息子ヨナタンは、道具持ちの若者に言った。『さあ、この向こう側のペリシテ人の先陣の方へ行こう』しかし、ヨナタンは父にそのことを知らせなかつた。」(1節)

ここではヨナタンが表舞台に現れることとなります。1節でヨナタンは、道具持ちの若者に「さあ、この向こう側のペリシテ人の先陣の方へ行こう」と言います。しかしヨナタンはこのことを父親のサウルに知らせませんでした。当然ですが兵たちもそのことを知らず、(3節)サウルもだれが出て行ったかを調べさせて、やっとヨナタンと道具持ちの若者がいないことに気がつきました。(17節)なぜヨナタンがサウルに向こう側のペリシテ人の先陣に行くことを事前に相談をしたり、告げてから行かなかったのか理由は分かりません。ヨナタンが子として服従しようとしなかったと主張する人々は、この二人の親子関係を問題にしています。またヨナタンのこのような行動は無謀で、行き過ぎた単独行動のようにも見えます。その中で、ヨナタンの行動の一つの動機の手がかりとなるのは、6節の「多くの人によっても、少しの人によっても、主がお救いになるのを妨げるものは何もない」とのことばです。つまり、サウルもイスラエルの兵たちも、人数が少ないとか、戦う武器が不足しているということで、ペリシテ人と戦う気力が失せていたのではないかと思います。しかしヨナタンだけは主への信仰をもってペリシテ人と戦おうとしたのでしょう。

私たちも周りの雰囲気流されてしまいやすい傾向があります。周りがあきらめムードであれば、自分自身もあきらめてしまったり、周りに不安な空気が漂っていると、自分も何となく不安な気持ちになってしまうのではないのでしょうか。むしろ私たちは周りの雰囲気に合わせるのではなく、そのような時にこそヨナタンのように、自分一人でも前進する信仰を主によって与えられたいものです。